

抄 録

鉤虫症に関する研究

(第 1 編)

鉤虫症患者に於ける十二指腸液所見 並に胃液酸度に就て

岡山醫科大學北山内科教室 (主任 北山加一郎教授)

助 手 上 原 偉 男

第 1 章 緒 言

鉤虫症の胃液所見に關しては既に多くの報告を見るも十二指腸液所見殊に膵臓機能に關しては之を見ず。唯血液、尿等の検査よりの推論にして何れも假説の域を脱せず。余は合併症なき本症患者 41 名に就き胃液酸度並に十二指腸液中の酵素量 (トリプシン、ヂアスターゼ、リパーゼ) を測定し本症に於ける膵外分泌機能を窺知し更に十二指腸液中の虫卵を検索し以下その成績を報告せんとす。

第 2 章 胃液酸度

58 例に就きて胃液酸度をみるに總酸遊離鹽酸共に減少せるもの多く、總酸に於て低酸と見做すべきもの 29 例 (50%)、遊離鹽酸に於て無酸及び低酸と見做すべきもの 32 例 (55.2%)、即ち約半数に胃液酸度の減少を認めたり。而して貧血高度なる例に低酸を認むる事多く殊に血色素量 50% 以下の高度貧血群に於ては遊離鹽酸の缺乏を認むるもの多し。

第 3 章 十二指腸液中の鉤虫卵 に就て

十二指腸液沈渣の鉤虫卵検出率は 34 例中陽性 28 例 (82.4%) なり。本虫の十二指腸部に於ける寄生は少きに拘らず本病患者十二指腸液内に本虫卵が高率に發見せらるるは興味ある所見にして、十二指腸液内の虫卵像は

糞便中の夫に比し検出に障碍となる夾雜物少く明瞭にして検出し易きによるものなるべし。

第 4 章 膵臓外分泌機能

第 1 項 十二指腸液流出量

理論上十二指腸ゾンデにて採取せる液量を以て直に膵液の量に並行的なりと認め難き爲排出液量は参考となすに止めたり。

第 2 項 十二指腸液酵素量

1) 貧血度と酵素量

本症をその貧血の程度に依り重症例 (血色素量 50% 以下)、中等症例 (51~70%)、輕症例 (71% 以上) の三群に分ち各群に於ける酵素量をみるに「トリプシン」量は重症例にては正常値以下の低値を示すもの 14 例中 6 例、中等症例にては 18 例中 4 例、輕症例にては凡て正常範囲内にあり。「ヂアスターゼ」量は正常値以下のもの重症例にて 7 例、中等症例にて 6 例、輕症例にては 1 例を示すのみ以上の如く「トリプシン」、「ヂアスターゼ」共に貧血度に比例して減少するを認めたり。「リパーゼ」量は重症例に於けるよりも中等症例に於て正常値下界或はそれ以下のもの多きを認めたり。

II) 胃液酸度と酵素量

本症の胃液總酸度及び遊離鹽酸に就き夫々過酸、正酸、低酸に分ちその膵液酵素量をみ

るに胃液酸度低きものに必ずしも膵液酵素量の減少を認めず。

III) 胃液缺乏性貧血の酵素量

鉤虫症に非ざる4例の胃液缺乏性貧血及びI例の無酸を呈せるパンチー氏病に就き膵液酵素量をみるに正常値を示したり。

・IV) 驅虫による酵素量の變化

膵液酵素量を驅虫の前後に就きて比較するに驅虫後に於て概して増量せるを認めたり。

第5章 總括並に考按

膵液の消化力は假令單位膵液の消化力強くとも液量少ければ消化力の絶対値は低し。而して十二指腸ゾンデを用ひて一定時間内に採取したる十二指腸液量は十二指腸腔内に分泌せられたる液の全量に非ずして桶の存在する部分を流過する液の一部分に過ぎず。桶は十二指腸の比較的上部に存在し蠕動運動の影響を蒙る事少く、桶の部分を流過する液量に對して一定の比を保つものとせらる。されど排出經過中突然流出停止し陰壓を加へて吸引せざるを得ざる事あり、又流出量の時間的變動も著しく、流出量を左右する因子の多きに鑑み特に著明なる變化に非ざる限り液量の變化を以て膵臟機能批判をなす事は困難なり。

本虫の催貧血性物質に關しては未だ闡明ならざるも本虫體がリポイド又はリポイド様物質に屬すべき溶血素或は毒素を分泌し之等の物質が本虫病貧血に對し重要な意義を有するとせば本症患者血液中にリポイド又はリパーゼの増加を認むるに非ずやと想像せらるるも、諸家は何れも之を否定し、余も十二指腸液内脂肪解酵素は概して著明な變化を認めず稍々減少の傾向を示したり。

林は血清抗「トリプシン」の著明な増加を認めたるも血清「ヂアスターゼ」、「リパーゼ」に變化を認めざる點よりそれを膵臟機能の亢進に由來するものに非ずして、虫體毒素の吸收によりて惹起せらるるものなりとせり。進藤は血清「ヂアスターゼ」の増加より膵臟機能亢進を推測せるも、余の41例に於ける十二指腸液酵素量をみるに既述の如く「トリプシン」の減量最も著明にして「ヂアスターゼ」「リパーゼ」の減少も認め貧血大にして重篤なる者に於て減量大にして膵臟機能の低下(Dyspankreatismus)を認めたり。その原因

は虫體毒素による膵臟機能の障碍なりや、貧血による二次的變化なりや遽に斷ずる事を得ざるも胃液缺乏性貧血症に於ては可成りの貧血の存在に拘らず酵素量の減少をみざる點より恐らく虫體毒素の影響なるべし。

塩酸の膵液分泌に對し重要な役割を果す事は一般に認めらるる所なり。本症に於ける胃液酸度は既述の如く重症となるに従ひ減少に傾く。而してここに興味ある事は本症に於て之等低酸無酸症に於ける膵液の状態なり。既に胃液缺乏時に於ける膵液の状態に關しては諸家の業績あるも鉤虫症に於けるそれを見ず。本症患者胃液酸度を過酸正酸低酸に分ちその酵素量を検討するにその差僅少にして酵素量の増減となす根據たり得ず。余の檢索せる鉤虫症の膵機能の低下が胃液酸度とよりも寧ろ貧血度と並行的なる事は既述の如くにして、本症に於て貧血大なる例は減酸症を認むる事多き事實より減酸症の例に膵機能低下の認めらるる理なり。されど本症の膵機能低下が胃液の減酸に原因するものなりや否やは鉤虫症に非ざる胃液缺乏性貧血が膵機能の低下を示さざる事實と併せ考へ遽に斷じ得ず。

第6章 結 論

- 1) 鉤虫症患者胃液酸度は重症となるに従ひ減少に傾く。
- 2) 十二指腸液内容中に鉤虫卵を認むる事多く82.4%に於て陽性を示したり。
- 3) 鉤虫症患者十二指腸液内の「トリプシン」、「ヂアスターゼ」、「リパーゼ」は減少に傾き膵臟外分泌機能の低下所謂 Dyspankreatismus の状態の存在する事を認めたり。
- 4) 各酵素中「トリプシン」量の減少最も著明にして「ヂアスターゼ」、「リパーゼ」之に次ぐ。
- 5) 酵素量の減少は貧血度の大小即ち本病の輕重と並行的なるが如し、胃液酸度の減少と必ずしも並行的ならず。
- 6) 本症の膵臟機能低下は虫體の毒素によるものなるべし。

拙筆に當り御恩篤なる御指導と御校閲を賜りし恩師北山教授に感謝す。

本論文原著は岡山醫學會雜誌第62年3號の別巻として發行してありますから御入用の方は著者迄御請求下さい。